フィールド（現場）からの風 ㉟

宮田守男

自然の営みが多くの人達に感動を与える大切さを知る

4月中旬、地元旅行会社が企画した旅に知人グループの一員として参加する。普段話せなかった話も、気軽にできる楽しさも旅の魅力でもある。大型バスの安全運行のため、出発は大町早朝6時で松本駅前や塩尻駅前でも参加者を乗車させ、梓川サービスエリアで運転手交代、途中の休憩時間も厳守する徹底ぶり。安全等確保の為、基準が益々厳格されていくのだろう。

昼食は、名物・佐野ラーメンと地元のニラ一杯のジャンボ餃子、ジャガイモを串刺したイモフライ。ご当地グルメの内容だ。しかし、参加者の食事風景を観察していると、同一メニューでの企画は、嗜好重視の個人顧客の団体ツアー離れを連想させる。

訪れた「あしかがフラワーパーク」は都市開発で現在の場所に、移設オープンした施設だ。もともと湿地帯だった跡が感じられる所も多く、開園の為の苦労は並々ならぬ取り組みだと伝わってくる。「250畳の大藤」を移植するプロジェクトが展開され、日本で初めての成功例として全国から注目を集めた場所でもある。興味が湧き、売店で日本の女性樹木医第一号で開園から平成27年まで園長を務めた「塚本こなみ」さんの著書「おおふじひっこし大作戦」の絵本を購入する。移植に携わった経過、有名な植物学者でさえ、根本の太さが直径60センチ以上は無理とされた学説がある中、太さ1㍍を超える藤移設の困難な取り組み。

移設のための研究と新たな知恵の習得など経過を知ると、それまでの「大きい」・「きれい」・「すごい」の鑑賞だけでなく、取り組み自体に感動を覚えてしまう。創設者の早川和俊さんは、大藤の移植成功を自らの目で確かめた後、93歳で天寿をまっとう。自身の生涯にわたる自然の命に対する丹精の賜物が、地域の財産にできるのだと知る事ができた。

今年は、開花が遅れていたが、海外の訪問客から「さくら色藤」として人気の「うすべに藤」は見頃で、写真スポットで大混雑。クルメツツジ・大シャクナゲ・八重桜も咲き乱れ、時の過ぎるのを忘れるほどだった。花木の下には、青色のネモフィラやルピナス、黄色系の花が色彩を考えて植栽され調和の見事さに、園内見学をより楽しい時間にさせた。訪れる者に植栽や風景をどの様に見せるか、知恵や工夫が大切だと知った旅でもあった。

（NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上）

花は見る人を感動させ、最新情報機器で全世界に発信させるのか海外からのお客様で大混雑に